

A black and white photograph of a construction site. In the foreground, a portable generator with the brand name '石川建設' (Ishikawa Kosei) is placed on a rebar grid. Several workers in hard hats and work clothes are visible. One worker is using a hose to pour concrete into a formwork structure. Another worker is standing near a rebar grid. The background shows a building with the text '石川建設株式会社' (Ishikawa Kosei Co., Ltd.) on its side. The ground is covered with a dense grid of rebar, and there are some construction materials and equipment scattered around.

PR旬報 年4回発行

（軽くて使い易く、労力の節約となる）

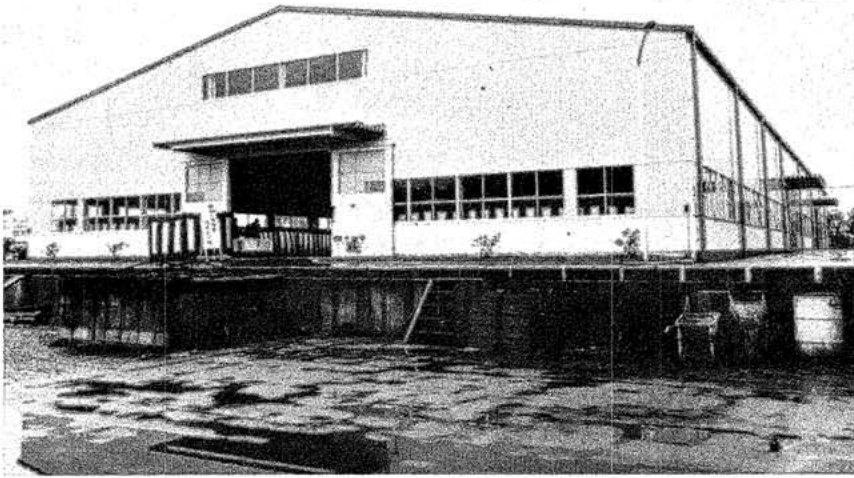


三笠産業館林工場増築完了

落成披露行わる

本年四月初旬以来、石橋建設工業株式会社に依頼していた三笠産業館林工場の増築工事がこの程完成し、八月十七日大安吉日を以て、山本館林市長はじめ、来賓の方々をお招きし、関係者一同が参列して落成式と披露宴が執り行われた。

今回増築された建物を加え、館林工場全体の床面積は一二、三六〇平方メートルとなった。



(新築された工場)

せられたお祝いのメッセージが読みあげられた。遠藤館林信用金庫理事長の首頭で全員が盆を高くとあげ祝宴に入った。

三笠の館林工場が出来た同じ年の昭和二十九年に館林は近隣の町七ヶ村を合併し、館林市として発足した。三笠産業が館林市の発展と共に歩んできたのはこれ程の縁があったのではないかと、山本市長は挨拶のなかで述べておられた。

来賓の皆さんからは、三笠産業館林工場は当市の有力企業であり、これは小林工場長の人格に負うところが多いと、お褒めの言葉を頂いた。この良き日のため各地から届いたお祝い電報が披露された頃から祝宴は盛り上がりを見せ、あちらこちらでテーブルで盃の交歓が行われ、やがて全員の三笠社歌合唱でクライマックスに至った。

多摩尾笠友会幹事長の発声で万歳を三喝し、館林工場長小林専務の閉会の挨拶をもって午後五時落成披露の祝宴は幕を閉じた。

水と緑にまつた、ゆとりと潤いのある街を目指す館林は、十年後には十万余の人口を擁する市となることを想定して総合的な街づくりを推進していると聞く、我々もこれに呼応して発展すべく、更に更に日々の努力を傾注しなければならぬ。

工場斎藤課長の司会により開会。まず、京谷社長が立ち、館林工場の設立以来今日のまでの沿革と、規模の拡張に伴って年代ごとの建設状況や、その当時の世相を回顧。今回の工事は館林工場が昭和四十六年に近藤工業団地へ移ってから三回目のものであるが、この工事概要を述べ、この工場では搭乗型のMDR-20N型ローラーの生産を予定していることを明らかにした。

増築工事に当り山本市長をはじめ、地元の皆様のご厚情ならびに下請会社のご協力、また資金面で群馬銀行さんのご協力に感謝の意を表して挨拶をされた。

担当者より工事経過の報告があり、次いで見事に短期間に工事を完了した石橋建設工業株式会社に感謝状が贈られた。

山本館林市長、中島市議会議長など来賓の方々よりお祝いの言葉があり、中山館林商工会議所会頭より寄

(落成式にて挨拶をする京谷社長)

職場を訪ねて

三笠産業

仙台出張所



のケヤキ並木は四季それぞれ趣を異にして、行く人の足を止めさせる。まさに「杜の都」である。

仙台は、戦国の世に奥州大名として名を轟かせた藩祖、独眼流の伊達政宗が青葉山に城を築き、六十二万石の城下町としたことにはじまる。慶長五年(一六〇〇年)、仙台城を築城するとともに城下の町づくりを行なった。

城の近くに大身侍を住ませ、市街中心に商人町や中級侍の屋敷町、そして外側には足軽町や寺町を配した。

現在の基盤の目録の市街の原形は、この城下の町割の際すでに出来上がったものである。

昭和二〇年の戦災被害を受け、けた街並みは戦後の復興により市の中心部の青葉通り、広瀬通りなどのメインストリートには高層ビルが林立し城下の面影を一時失った。

しかし、近代的な都市のたたずまいの中にも三七〇有年の歴史をもつ城下町としての史跡が随所にみられ、訪れる人達に仙台の旅情をよびおこしてくる。

特に青葉城跡からの展望はすばらしい。東北の玄関口仙台は、上野から特急「ひばり」で四時間、東北自動車道を車で走っても同じ位の時間で着く。

東北新幹線の工事と並行して新築された駅ビルを出ると、まず目につくのが整然とした街並に映える緑の街路樹である。この市内の目抜き通り

(東北の玄関、仙台駅前も自動車)の洪水である



しく、街路樹が満ち溢れ、前方に広瀬川が貫流し、自然の美しさをそのままにとどめている街並みが見渡せ、天気の良い日には太平洋まで見えるという。

また青葉城の本丸跡には政宗公の騎馬像や土井晩翠の「荒城の月」、島崎藤村の詩碑などが建てられている。

毎年八月六、七、八の三日間、全市を七色の吹き流しで埋める、東北三大まつりのひとつ「仙台七夕まつり」は伊達六十二万石の伝統と豪華けんらんさで名実ともに日本一を誇っている。

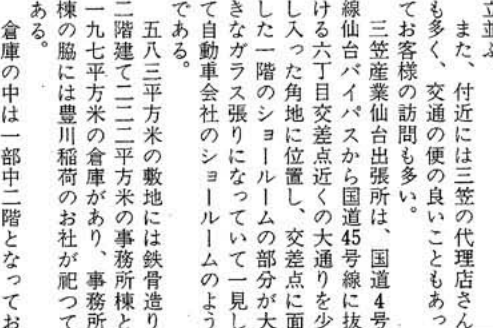
三笠産業がこの東北第一の大都市仙台市に営業拠点である仙台出張所を開設したのは今から八年前の昭和四十七年である。

当初は市内本町一丁目の目抜き通りに面したビルの一室で業務を行っていたが、売り上げの伸びとともに手狭になったため、昨年の暮れに現在の卸町に事務所、倉庫を新築し移転した。

卸町は東北地区の物流の拠点とすべく仙台市が造成した流通団地で出張所の近辺には運送会社や倉庫が立並ぶ。

また、付近には三笠の代理店さんも多く、交通の便の良いこともあってお客様の訪問も多い。

(仙台出張所の事務室内、めずらしく全員が顔を揃えている)



倉庫の中は一部中二階となっており、一階が製品庫、中二階が部品庫になっていて、東北各県のお客様に即納できる体制がとられている。

一方、事務所棟は一階がガラス張りのショールームと事務室になっており、三笠の製品が歩道寄りの前面に展示され、応接セット、観葉植物等がうまく配置してあり、お客様にくつろいで商談していただくという所員の心遣いが感じられる。

二階には二つの応接室と会議室があり、会議室ではディレクターさんの講習会等も行なえるようになってい

現在この出張所には、昨年六月に着任した大沢所長をはじめ男子七名女子二名が働いているが、守備範囲が北は青森から南は福島まで、仙台から奥羽山脈を越えて日本海側までと広い為、限りある出張所員でこれをカバーするには、常に出張を繰り返して、所員全員が顔を合わせる機会が少ないとのこと。

特に昨今の景気の冷え込みは我々の業界も例外ではなく、これを克服するべく出張所員打って一丸となつて日夜きびしい戦いを続けている。

お稲荷さんもきつこの努力に報いてくれることでしょう。仙台出張所の皆さんのますますの活躍を期待したい。

原田記

振動コテを使って能率向上

創意工夫で疲労も軽減

帯広市の石野コンクリートの現場にて

三笠独特の商品、MVF-A型振動コテを使って見事なコンクリート製品を造っていらっしゃる石野コンクリートは、この振動コテを積極的に活用し、作業の短縮と品質向上を目指しています。

おまけに振動コテを型枠に押し付けて、この振動を利用してコンクリートの剥離防止にも役立ち、まさに一石二鳥の活用ぶりです。



この合掌型水制ブロックは重量2ton、N46型新鋭振動パイプレーターを使って一日に30基の割合で造られています。

コテを使って仕上げる面積は一基当り約一平方メートル、この作業は女子従業員が受持っている、普通のコテを使っている作業で二回仕上げる所要時間が約7分。

これを振動コテを使っていると約4分できれいに仕上げる事ができます。

振動コテを使っている仕事ぶりを見て、最初の振動で水分と気泡が表面に浮きあがり、次いで振動をかけないで軽く一撫で水分と気泡を取り除けば表面はきれいに仕上がっています。

まことに簡単なもので、振動コテは普通のコテに比べ多少目方はありますが、軽く押してやるだけでコテ自身から振動するので、従来のように上からコンクリートを押しつけるようにして仕上げることをしなくともすむので、腕の疲れも少なく、振動コテの防振ゴムが良く効いて、作業

振動コテを使うと腕の疲れも少なく、仕事も早くできます



石野コンクリートさんは品質管理に大変熱心で、いたるところに創意工夫の様子が伺えました。

振動コテの次は三笠の高周波パイプレーターを使って更に生産性の向上を考えておいていただくため、更に良い製品を造りあげていただく全社を挙げ

て取り組んでいらっしゃる姿勢が感じられました。

札幌出張所 神田記

